

臨床栄養部宮澤靖部長 退職にあたって	3
2018年 近森会グループ MVP	4
第7回ポリオ検診会 和田恵美子	6
カフェ・ブルースカイ オープン	7
出張 手嶋英樹	8
出張 町田清史/竹崎智博	9
体組成分析装置導入 塚田暁	12

www.chikamori.com ● 高知市大川筋一丁目1-16 tel. 088-822-5231
発行●2018年12月25日 発行者●近森正幸 / 事務局●寺田文彦

年頭所感

今までの発想にとらわれない自己変革 ～キャッシュフロー重視の経営方針～

近森会グループ 理事長 近森 正幸



はじめに

3年前の2016年4月の診療報酬改定で7:1の看護師を揃えれば診療報酬が入るというストラクチャー評価からアウトカム評価が導入され日本の医療が大きく変わり、私ども近森会グループでも救急や紹介患者さんの受入れの増加、人件費削減を含む諸経費のコストカットや地域包括ケア病棟34床の開設などを行わざるを得なくなりました。

高知の地域医療も大きく変化

昨年4月の診療報酬改定ではアウトカム評価が一段と強化され、急性期医療では7:1看護の重症度・医療看護必要度が30%となり、回復期ではFIMによる改善率、在宅復帰率の強化、慢性期では医療区分2、3の重度の患者さんが80%以上でなければ病院として存続できない状況になっています。

そのため、すべてのステージで重症の患者さんを数多く集め、早く治して在宅へ帰っていただくという競争が始まっており、在院日数の減少から稼働率の低下、一般病床の減少や地域包括ケアへの転換、慢性期では廃院や施設である介護医療院への転換が始まるうとしていきます。

何が起きても不思議ではない

激変の時代

このような地域医療の変化は、高齢化が進み病床数の多い高知県で先進的

に起こっていると考えていましたが、東京でも大学病院の勝ち組、負け組がはっきりし、稼働率の著しく低下した大学病院も出ていますし、中小病院は全体に厳しくなり、ビル開業も頭打ちになっています。

都内でも新卒の看護師の就職も難しくなり中小病院に流れたり、労働環境の厳しい公立病院から医師が辞めていたり、北海道などの自治体立病院では給与カットも始まっています。大災害が多発する自然界だけでなく、医療界も何が起きても不思議でない激変の時代が始まったように思います。

時代の変化に対応する近森会グループ

そういう時代の変化に備え、近森会グループは7カ年計画で全面的な増改築工事を行い、これから20年、30年耐えるハードを作り上げました。

ソフト面でも20年前から地域医療連携をすすめ、さらには2000年からICUなどの重症病棟を整備し病棟連携も行ってきました。2003年には栄養サポートチームを開始することで、本格的な多職種による病棟常駐型チーム医療がスタートしています。このように病院や病棟、スタッフの機能を絞り込むことで医療の質を上げ、労働生産性を高め、病院機能を整備してきました。

今までの発想にとらわれない取り組み

さらには今までも行ってきましたが、サービスを向上し救急や紹介、一

般外来からの入院を増やし、診療単価を上げ、医療の質を確保しつつコスト削減など、今までの発想、例えば「お給料は年功序列で毎年上がるもんだ」、「祝日は休むもんだ」といった発想にとらわれない取り組みを迅速、確実に実行することが求められています。

右肩上がりの時代から右肩下りの時代に大きく転換したことで、診療報酬という公的価格で医療が政府から保護されていたことが、この数年で大きく変わり、企業では当たり前に対応をせざるを得なくなりました。

本音の経営方針

時代が大きく変わり、「今までの発想にとらわれない自己変革」が求められる時代になりました。医療の質を上げ、それを限らない経営改善で支え、高知の救命救急医療の基幹病院として県民・市民のために最後まで生き残り責任を果たしていきたいと決意しています。そのためには「キャッシュフローを最も重視する経営方針」で必要に応じ投資が出来る病院経営を行っていきます。

生き残る病院は、大学病院のように大きい病院でも、繰り入れがいっぱい入る公立病院でもありません。自己変革を限りなく続けることができる病院こそが生き残ることができます。皆さんとともに、これからも元気に歩んでいきますので、どうかよろしく願いいたします。

ちかもり まさゆき



認定看護師として初心を忘れず

糖尿病看護認定看護師
近森病院本館 6階 B 病棟
看護師 主任 岩井 千代美

先日、認定研修時のレポートが目に留まりました。そこには自分の知識不足や課題に追われる毎日、認定看護師となる不安や期待まで様々な思いが交錯していました。

認定看護師として5年……。振り返ると糖尿病教室やフットケアの立ち上げ、外来での看護介入や退院時指導、院外では高知県糖尿病看護「土佐の会」での活動など糖尿病に思い

を寄せる仲間の協力を得ながら形にする事ができました。

現在整形病棟では薬剤師と周術期における血糖コントロールに関わりインスリン注射の説明や医師と相談しながらインスリン量の調整、管理栄養士へ栄養指導の依頼など患者さんへの療養指導を多職種と連携して行っています。

療養指導を行う際には、当たり前のことですが患者さんの想いを傾聴し患者さんを知ることが大切になっています。どのような療養生活でもその人なりの過去の経験や考え、努力が伺えるため、それらを否定せず、正しい情報を提供し、患者さん自身ができる療養方法を提案・支援していくことが役割だと思っています。

上手くいくことばかりではありませんが「あなたがよかった、

頑張れた」と言われると、この上ない褒め言葉をいただいたと嬉しく思い、患者さんと関わっていくことの喜びを感じます。

ある講師が「認定研修は認定看護師になるための覚悟を決める所」と言われました。当時交錯していた思いから覚悟を決めた初心を忘れず、患者さんのためにできることを、これからも継続していきたくと思っています。

いわい ちよみ

1月の歳時記

クリスマスローズ

近森病院北館 3階病棟
看護師 野村 真弓



寒葛葉の和名を持つクリスマスローズ。冬に咲く可憐な姿で愛される花です。古くから、ヨーロッパでは、クリスマスローズの香りが病人のおいを消すと信じられてきたそうです。これにちなんで、「私の不安を和らげて」という花言葉もあるそうです。白い花びらが幾重にもなる姿は純粋で、私の好きな花であり、この時期に渡す贈り物にも最適です。

のむら まゆみ



● 近森看護学校通信 31 ●

11月11日、オープンキャンパス

近森病院附属看護学校 事務長代理 中山 潤一

オープンキャンパスに保護者を含め33名の参加がありました。看護学生はオープンキャンパスのスタッフとして体験報告や看護技術体験、個別相談、学校めぐりなどを担当し



ました。また、昼食にカレーライスを用意して教職員と学生は参加者と一緒に食事をしました。学生が参加者に積極的に声掛けたこともあり、参加者からの感想は「とても話しや

すかった」「受験に向けて不安が減った」「より深く学校のことを知ることが出来て良かった」等、オープンキャンパスに参加して良かったという感想を多く頂きました。次回は3月を予定しています。

なかやま じゅんいち

★ 第39回 ★ クリニカルパス大会

2月18日(月) 18:00~19:30
管理棟 3階会議室 2-3
整形外科 UKA
(人工膝関節単顆置換術) のパス

牽衣頓足

臨床栄養部 部長 宮澤 靖



「光陰矢の如し」とはよく云ったもので、振り返ってみますと近森会に所属して16年の月日が経過していることに驚いています。長野県出身の私が地元の病院に就職してその後、アメリカの病院に留学・就職し、高知にやって参りました。着任早々から仲間に快く入れていただきました。

近森リハビリテーション病院に所属して直ぐに近森病院の科長になり2009年からは近森会臨床栄養部部長としてグループの統括という大切な仕事をさせていただきました。16年前にはたった4名しかいなかった管理栄養士も現在では29名の管理栄養士と4名の長期研修生、1名のクラークの34名の大所帯になりました。

管理栄養士が主体となっている栄養

サポートチームも昨年度約5,000症例をサポートさせていただき、過去に近森会を卒業して他院に転職した管理栄養士の8名のうち7名がそれぞれの施設で部門長になり、近森会で得たノウハウが全国に広がりつつあります。

色々なことが思い出されとても全てを紹介できませんが強烈に記憶に残っている二つの話は、入職当時、管理栄養士がまだ少人数で1人で3～4病棟を担当していた頃、理事長に「成果が出ないのなら1病棟1管理栄養士体制にすれば」と言われ、どこの病院でもマンパワー不足の管理栄養士を「たくさん雇用しろ」という発想が理解できませんでした。現在の体制の原点になった言葉でした。また、川添昇管理部長（現、監事）に「救急、リハビリ

の近森、5年以内に栄養も入れます」と大見栄を切りましたが3年ほど経過した頃に「約束を守ってくれてありがとう」と言われたことを覚えています。

臨床栄養部は、85%が県外出身者であります。「やり残したことが無いのか？」と問われるととても「ありません」とは言えないのですが、心残りが後に残していく若い管理栄養士達の将来です。故郷を離れて高知に来ております。どうぞ引き続きお仲間の輪に入れていただきお導きいただきたく切にお願いいたします。

「近森会を卒業することは世の中が良くなることだ」とおっしゃった先生がいらっしゃるようですが、私も皆様にそのような言っただけのように新天地で精進していきたいと思っております。最後になりましたが、近森会のさらなるご繁栄と皆様のご活躍を心よりお祈り申し上げます。本当にありがとうございました。
みやざわ やすし



宮澤靖部長に感謝して

近森会グループ理事長

NST Chairman 近森 正幸



宮澤部長とのなれ初めは、当時の高知医科大学副学長 小越章平先生が日本静脈経腸栄養学会の理事長をされて、栄養サポートチーム（以下NST）を作りたいという宮澤部長の希望が叶えられる病院として、2001年にご紹介頂いたのが最初です。

2002年1月に入職され、褥瘡対策の栄養サポートからスタートし、その実績から高橋脳外科部長が部科長会で提案され、2003年7月からNSTが始まりました。栄養科の科長として少な

いスタッフで夜中の10時、12時まで頑張ってくれましたが、なかなかNSTのアウトカムは出ませんでした。2006年の夏、本館北側の小川にかかる橋の上で二人でどうしたものかと話している時、栄養サポートは業務量が多いにも関わらずスタッフが少なすぎることにアウトカムが出ない原因であると、突然閃きました。その場で、宮澤部長に1病棟1管理栄養士体制を取るよう指示しましたが、この瞬間が病棟常駐型チーム医療の始まりでした。

その年にはDPCの算定が開始され、電子カルテの導入でチーム医療の基盤整備が進み、2007年3月には近森病院臨床栄養部部長兼栄養サポートセンター長に就任、スタッフの充実と教育体制を整備し、名実共に全国一のNSTにまで育て上げてくれました。

宮澤部長は国レベルの栄養サポートを考え実践できる管理栄養士の「大医」と考えています。新しい天地で大きく飛躍してくれることを願っています。

ちかもり まさゆき



2018年 近森会グループ MVP



▲ MVP 受賞者 認知症ケアチーム ▶
▼表彰 有限会社石原産業 代表取締役 石原寛様



	部門・職種	受賞者	受賞理由
チーム受賞	近森病院認知症ケアチーム	葛目 大輔、山崎 正博 岡本 充子、久保 博美 萩原 博、小松 有希 筒井 由佳、宮崎 俊明 川津 奈加、佐伯 佳奈子 川渕 正敬、田村 美穂 道倉 由美香、井上 浩明 植田 雅恵	2016年4月より認知症ケアチームとして活動し、病棟スタッフを巻き込んだカンファレンスの開催や、現場のケアの質向上のため看護職を対象に毎年数多くの研修開催を続けてこられました。 また認知症があっても必要な医療・ケアが受けられ速やかに退院ができるよう介入し、現在では毎月600件近い加算の算定にも貢献しています。今後ますます重要となる認知症ケアチームの活動を期待しています。
	近森病院 リンクナース活動グループ	町田 清史 田邊 光司 池澤 友朗	ERの血液培養検体数が圧倒的に多く、高コンタミネーション率が続くことに着目し、感染管理ベストプラクティスにおいてERでの血液培養採取に関する手順書の作成、および関わるスタッフ全員に手順書を用いての採取手技の周知を行うことで、みごと血液培養のコンタミネーション率を低下に導き、低値を維持しています。この取り組みは他部署の模範となるものです。
患者さんアンケート (特に好感が持ったスタッフ上位者)	近森病院循環器内科医師	要 致嘉	「リラックスして話せる」、「分かりやすく丁寧なペースメーカーの説明に感動した」、「内容も説明も処置も素晴らしい」、「受診しなければ大損と感じた」といった感謝の声が多く寄せられ、多くのファンを作っています。 明確な口調と真摯な姿勢など、患者さんに寄り添った存在です。
	近森病院本館6階B病棟 看護師	横田 晴	「優しく声をかけてくれた」、「入院中の心を癒された」など、あなたの優しさや笑顔に心を癒された患者さんから、感謝の声が多く寄せられています。 あなたの病棟全体を包み込む癒しの力と、老若男女を問わず虜にする魅力を称えます。



▲川井副院長（乾杯）



▲近森理事長（挨拶）



▲入江副院長（中絶）



初期臨床研修管理委員会
三木委員長（挨拶）

▼リンクナース活動グループ



▲▼個性豊かな研修医たち



◀忘年会会場



	部門・職種	受賞者	受賞理由
個人受賞	クリニカルパス委員会事務局 診療情報管理室	岡林 若葉	各パスに精通し、パス改定に関わる資料作り、パス大会の準備運営や医師との調整役など、様々な業務を一手に引き受けているにもかかわらず、スタッフからの問い合わせにも気持ちよく対応されています。また、パス学会では発表者の資料を親身になってサポートし、皆から頼りにされている人材です。そのコミュニケーション能力を存分に活かした活躍ぶりを称えます。
	災害対策委員会 近森病院 救命救急センター（ER） 看護師 医事課・ 地域医療連携センター	坂本 明美 北川 真也	災害対策委員として、類稀なリーダーシップをとり、多くの訓練を開催し、継続して課題解決に取り組まれています。特に本年の国が主催の大規模地震時医療活動訓練と合同で行った災害訓練では、通常業務と並行して県庁で行われる打ち合わせをはじめ、膨大な準備をし、当日の訓練を大変爽り多いものとされました。本年の多大な貢献を称えるとともに、今後のさらなる活動にも期待しています。
	有限会社石原産業 代表取締役	石原 寛 様	昭和 58 年より長きにわたり、近森会グループの運営をサポートしていただきました。回復期リハ病棟の前身である近森リハビリテーション病院の設立準備から関わり、在宅総合ケアセンターにおける在宅支援、テクノエイドなど多岐にわたって活躍され、グループ全体の医療機器の設置・保守点検に尽力されました。長年のご苦労と多大な功績に感謝いたします。
個人受賞（ハートセンター）	近森病院 ICU 看護師	吉野 広樹	集中系病棟のリーダーと協働し、夜間のベッドコントロールを柔軟に行える中心的存在です。医師をはじめとする多職種との連携において、常に冷静に、穏やかに、また時には毅然とした態度で対応できる素晴らしい人材です。救命救急センターとしてベッドコントロールは至上命題であり、今後の活躍も期待しています。
	近森病院医療福祉部 地域医療連携センター ソーシャルワーカー	三浦 梢	集中病棟担当ソーシャルワーカーとして、患者さんやご家族との調整はもとより、早期からケアマネージャーとの連携を図るなど、スムーズな退院・転院を実践しています。また、入院患者さんが多数いるにも関わらず、介護連携指導書、退院支援計画書の作成業務にも真摯に向き合われており、その功績を称えます。
	近森病院手術室看護師	澤田 美咲	経験年数が浅いにも関わらず、緊急手術への柔軟な対応や冷静確実な業務遂行の姿勢は医師、看護師、CEからも信頼を寄せられています。心臓血管手術に対して予習復習を怠らず、スキルアップに日々邁進し、若手ながら中核を担い後輩の指導をするなど、今後の期待されます。
	近森病院薬剤部薬剤師	岡林 真由	患者さんご家族、および医師や看護師からの依頼や相談に対して、レスポンスを早く、且つ的確な回答を返すという意識を常に持ち、実践されています。相談しやすく、対応が丁寧で患者さんのことを熱心に考えて仕事をしている姿は尊敬を集めるほどです。

新たなステージに進んで

近森病院内科
部長 白神 実



2018年4月近森病院に転勤し、他科及び内科の先生方、特に呼吸器内科兼感染症内科石田正之先生、中岡大士先生に御支援を頂いてようやく近森病院にも慣れてきました。2018年11月内科部長に昇格し、今後は、①地域連携による肺炎患者さんの早期の紹介の枠組み作り、②院内感染対策、③舌下免疫療法に力を注いでいきたいと思っておりますのでよろしくお願ひ致します。 しらが みのる

継続したポリオ検診会の実施

近森リハビリテーション病院
院長 和田 恵美子



今年11月24日「第7回検診会」を開催しました。定員を超える申込みをいただきましたが、より丁寧な診察ができるよう、今回は新規患者さんを含む8名の方にご参加いただきました。

今年も全国から医師、理学療法士、義肢装具士が7名、参加してください、患者さんからのさまざまなお相

談に対し、各専門分野からの適切な診断、アドバイスができ、患者さんにも満足いただけた検診会になったと思います。

近森リハビリテーション病院では、継続してポリオ検診会を実施してまいりますので、ポストポリオでお困りの方がいらっしゃいましたら、ぜひご紹介いただきますようよろしくお願ひいたします。

また、毎週木曜日の午後には、装具外来を実施しておりますので、ご相談などがありましたら医療相談室までお寄せください。

わだ えみこ



リレー エッセイ

癒しの海

スキューバダイビングをしたいと思ひ数年。一昨年、ライセンスを取得しました。

大月町にある柏島の海はとても綺麗



近森リハビリテーション病院
6階病棟西 看護師 遠藤 恵

麗で、初めて潜った時の感動は今でも忘れられません。初めてのナイトダイビングは暗い海に潜るのでドキドキしましたが、光が幻想的で感動しました。去年は念願のカメも見ることができ、あの時の感動も忘れられません。海の中ではたくさんの生物に出会えるのですが、私のお気に入りにはヤドカリです。ナイトダイビングの時に綺麗な紫色のヤドカリを紹介してもらいヤドカリが好きになりました。海の中で見たヤドカリを写真に撮って図鑑を見ながら特徴などを見るのが楽しみのひとつです。

ダイビングを始めるまでは柏島に行ったことはなかったのですが、去年は秋桜や向日葵を見に行ったり、ダイビング以外でも大月町に行き柏島まで足をのばして海を眺めて癒さ



れています。月1回、多い時では月2～3回ダイビングに行っています。

冬はスノーボードをするのでダイビングをしたことはありませんが、ヤドカリたちに会えなくなるのは寂しいので、今年は冬もダイビングをしようと思っています。これからも疲れた時は柏島の海に癒してもらい仕事も頑張りたいと思います。

柏島は少し遠いですが、写真で見るととても綺麗な海なので、行ったことがない方はぜひ一度行ってみてください。 えんどう めぐみ

「Café BLUE SKY」 オープン

就労継続支援 B 型事業所「青い空」では、主に事故や脳卒中により記憶・注意・思考・行為・学習・言語など高次な知的機能に障害が起きた「高次脳機能障害」の方々が通所され、作業を通じて就労に必要な支援を行っております。



この度、8月1日に近森リハビリテーション病院 1F に「Café BLUE SKY」をオープンいたしました。メニューはコーヒー、ジュース、シフォンケーキ、ソフトクリームなどがあります。

利用者さんと共に少しずつクオリティの高いカフェにしていきたいと考えています。一息休憩の際はぜひ「Café BLUE SKY」へ。

(NPO 法人脳損傷友の会高知 青い空 管理者 福岡知之)

私の趣味

NO MUSIC, NO LIFE

近森リハビリテーション病院
作業療法士 吉井 麻悠



私の趣味はトランペットです。花形ともいわれる楽器であるため、パワフルで明るいイメージをもつ方も多いのではないのでしょうか。実は、哀愁漂う音色や温かく優しい音色など、色々な表情を奏でることができ、魅力がギュッとつまんだ楽器なのです。そんなトランペットが、私は大好きです！

中学・高校と吹奏楽の経験を経て、現在はビッグバンドに所属しており、定期演奏会・ジャズフェスタ・



イベントでの演奏を中心に活動しています。また、今の目標はこわくて踏み込めていないセッションに参加することであり、コード理論やアドリブ奏法を勉強中です。

音楽の魅力はたくさんあります。皆で作りに上げる音楽がまとまり、聴いてくださる方も含め一緒に楽しんでいる瞬間を感じられることも、醍醐味の一つであると思います。ステージ上では、いつも緊張で震え泣きそうになっていますが、それでもこの瞬間を感じられることが楽しくて幸せで最高です！！

これからも、経験を積み重ね音楽性・人間性ともに磨き、聴いてくださる方の心に響く様に色々な表現ができるトランペッターを目指し、おばあちゃんになっても吹いていきたいです。 よしい まゆ

ハッスル研修医

笑顔



初期研修医 中谷 真大

高知県宿毛市出身で、岡山大学を経て、今年から高知県に戻り近森病院で研修をさせていただいております。

働き始めてはや8カ月が経ち、普段の業務にも慣れてきました。今までに形成外科、膠原病内科、消化器内科、麻酔科とさまざまな科で研修を行い、上級医やコメディカルのスタッフはもちろん、患者さんからも日々学ばせていただいています。

自分は周りの人と話すのが苦手な性格で、なかなか他人に話しかけることができません。高いコミュニケーション能力が求められる医師にはあまり向いている性格ではありませんが、そんな自分が普段から気を付けていることがあります。

それは「笑顔とあいさつ」です。

それだけは、どんなに忙しくても疲れていても、絶やさないように心がけてみなさんから声のかけやすい医師になれるように、2年間の研修を頑張っていきたいと思っております。

まだまだ未熟ものですが日々精進してまいりますので、病棟や廊下で見かけたときはぜひ声をかけてください。

なかたに まさひろ

OLVG East 病院 低侵襲心臓手術見学

近森病院心臓血管外科

部長 手嶋 英樹

多忙の晩秋に初めてのオランダ・アムステルダムを訪問する機会をいただいた。本当にありがとうございます。

まず思ったのが、トイレのアレの高さが異様に高い、建物の外観は古典的に統一されているが中はかなり派手、歩行者より極めて自転車優先、夜のテレビは18禁など、雑感だった。

OLVG East 病院にて低侵襲心臓手



術 (MICS) の見学。驚いたのはスタッフの年齢層の高さ、特に見学した心臓手術の部屋では60才!ん? 付近のスタッフが半数以上を占めていた(無論女性スタッフには年齢、直接は尋ねていない・・)。

手術に関しては最新の機器や道具も見受けられたが、洗練され安定しているチームワークが一番に目を惹いた。術者 Cocchieri 先生の腕もさることながら、経験豊富でタフ→問題点の把握が迅速→無駄が少なく手が動く→頭も働く→洞察力に優れて



▲左端筆者

いる→ case by case で即座に“優れた”対応ができる、など外科治療的な観点を踏まえても、「誠実さや会話力が最も問われる」のが手術という仕事で大切なことだろうとの結論が垣間見えた。

このような術者やスタッフの教育や選定の王道は何だろうか。努力、師匠、システム?、根性??、などと考えさせられ、帰路についた。他、

短期間の滞在で観光もあまりできなかったが、運河を散歩するだけでも欧州の異文化の刺激を体感できた。

ただ、ヒートテック(超極暖)は必須で、もし持参していなかったら寒かったら思い出す、良い旅だった。

てしま ひでき

看護師特定行為研修 3期生の実習が始まります。

看護師特定行為研修 指導責任者 川村 佳代

▼執筆者は集合写真前列右から2番目

当院の「看護師特定行為研修」は本年で3年目となりました。3期生8名は、12月末までに共通科目をすべて修了し、2019年1月から「栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連」、「血糖コントロールに係る薬剤投与関連」の区別科目を履修します。

脱水や低栄養に対する輸液および糖尿病に関する病態を学んだのち、1月末より近森病院において、問診と身体所見、検査所見などをとり、アセスメントし、「手順書を用いた特

定行為」の実習を行います。

実習を通して「看護師である原点を忘れることなく特定行為を行う人材」となり、医療・ケアの質向上に貢献できる力を身につけたいと思います。

これからも協力よろしくお願いいたします。



かわむら かよ

専科ベッド無しで運用する 一般病床 500 床 全室個室のベッドコントロール

近森病院救命救急センター (ER) 看護師長 町田 清史



足利赤十字病院は 555 床の救命救急センターを有する病院です。元競馬場の広大な土地に建設されており、災害時も多く多くの市民（被災者）の受け入れができる建物となっていました。同敷地内の検診棟 1F に足利市休日夜間急患診療所があり、Walk in 患者さんを休日 10 時～16 時、夜間 19 時～22 時まで診療。入院や精査が必要な場合は、足利赤十字病院等へ紹介する仕組みとなっており、市をあげて救急医療体制を整備していました。高知市の三つの救命救急センターに 1 次～3 次の患者さんが集中する現状を解消する仕組みとして参考にさせて頂きたいと思いました。

施設見学で自分が一番驚かされた

のは、一般病床全てが個室で、患者さんの状況に関係なく自由に病床が利用でき、病床を最大限に稼働させ、その管理を院長より一任された地域連携室のベッドコントロールNsと管理当直師長とで 24 時間対応している点です。

当院でも地域医療連携センター師長と管理師長がベッドコントロールを行い、24 時間いつでも入院できるように努力していますが、専科のベッドが優先されるなど入院できる部屋が限られ、コントロールが難しい点があります。病院全体でどの部屋でも患者さんを受け入れるという意識を持ち、取り組んでいかなければと

思いました。

他施設を見学する機会は、自施設の良さにも気づき、更に患者さんにとって『いい病院』にしていく為の、ヒントが得られるとても貴重な機会だと思いました。

お忙しい中、丁寧に説明していただいた足利赤十字病院の皆さん、このような機会を作ってくれた病院に感謝し、得たものを活かせるようにこれからも頑張りたいと思います。

まちだ きよふみ



◀▲災害に強い病院。災害時、講堂は患者収容スペースに転換。簡易ベッド 50 床を完備



▲全病床を個室化しプライバシー、感染症の問題を解決。ベッドコントロール容易（男女調整不要）により、稼働率向上

「職員満足なしで患者満足なし」

診療支援部医事課 課長 竹崎 智博



今回、栃木県にある足利赤十字病院の病院を見学させていただきました。足利赤十字病院は、栃木県の足利市を中心とする両毛医療圏（人口約 80 万人）の中核病院で、赤十字グループの中でも上位に入る優秀な経営成績を収めている病院です。

「患者の皆さまがかかってよかった。職員のひとりひとりが勤めてよかったといえる病院」という理念のもと、生き生きと働くことができる職場づくりができており、患者さんの立場に立った構造や運用づくりが随所に見られました。

一部紹介すると、足利赤十字病院

では、総合受付を廃止し、直接、受診科で受付から診察・会計まで行う「ワンストップ外来」を導入しています。通常、総合受付で受付した後、各受診科に行くのが一般的ですが、直接、受診科で受付できれば、患者さんはわざわざ総合受付に立ち寄る必要はありません。「患者さんの歩く距離を少しでも短くできないか？」という課題のもと、「総合受付」という固定観念にとらわれない運用は、職員の皆で意見を出し合って生まれたそうです。

今回、見学させていただいた中で特に印象に残った点は、目標達成に

向けて病院一丸となって取り組む団結力です。院内の連携もしっかり取れており、職種の垣根を超えてお互いが協力し合う風土が根付いているように思いました。見学中、すれ違う職員が笑顔で挨拶をしてくれるのも印象的で、「職員満足なしで患者満足なし」の石原事務部長の言葉通りの病院づくりができていると感じました。

たけざき ともひろ

お弁当拝見 67 母の手作りお弁当



近森病院画像診断部
診療放射線技師 水口 柚里

私のお弁当は、母の手作りお弁当です。父のお弁当と一緒に作ってくれています。

旬の野菜を使った浅漬けや和え物などを入れてくれていて、「この野菜の季節になったんだなあ」と感じな

がら、お弁当を食べています。卵焼きも、ハムだったり野菜だったりいろいろ入っていて、彩りがあります。

毎日美味しいお弁当を食べられて、母に感謝しています。



これからも、ぜひよろしくお願ひしたいです。

みなくち ゆうり

歯科無料健診の実施

近森会健康保険組合では、新しい保健事業として11月29日に高知県歯科医師会のご協力を得て、初めて歯科無料健診を実施しました。

歯科医師5名、歯科衛生士8名の体制で約60名の健診と必要な方には保健指導を行っていただきました。



2018年11月の診療数 システム管理室

近森会グループ	
外来患者数	18,326人
新入院患者数	1,022人
退院患者数	1,002人
近森病院（急性期）	
平均在院日数	13.54日
地域医療支援病院紹介率	79.67%
地域医療支援病院逆紹介率	212.62%
救急車搬入件数	548件
うち入院件数	295件
手術件数	471件
うち手術室実施	304件
うち全身麻酔件数	184件

● 2018年11月 県外出張件数 ●
件数 76件 延べ人数 134名

編集室通信

私事で恐縮ながら、「近森」の職員として迎える新年も35回目。入職の年も亥の年で、当時の先輩から「近森の管理職には亥年生まれが多い」と教えてもらったことを思い出しました。現在の「近森」。多彩で個性ある数多くのスタッフが揃い、チームで前に踏み出そうとしているのを目の当たりにしています。気持ち新たに、私もまだ頑張ります。

ひょん

果てしなくて奥が深い。だからハマる

救急認定 SW 資格をいちばんに

「ソーシャルワーカー (SW)」はいま、片仮名がどれほど苦手な層にも、知らぬ人はないほど馴染み深い職種になっているのではないだろうか。SWの発したひとことで「くつろいだ (※安心した)」といった経験をお持ちの人もいるだろう。

「ソーシャルワーク」、つまり「社会福祉援助技術」を使って援助をする人がSWで、近森会グループ医療福祉部では現在総勢30人が働いている。

川津奈加部長は、三浦SWの近ごろの発言を「芯があってブレない」と評し、SWの救急認定開始に合わせていちばんに資格を取得したり、学会発表も積極的に行なうなど、その仕事ぶりについて、「ソーシャルワークの魅力に、改めて目覚めているみたい」と、期待を込め、信頼を寄せている。

「ソーシャルワーク」の醍醐味

患者さんやご家族が抱える問題を聴き、あるいは聞き出し、不安も不満も受け止め、ときに心のケアも行なう。そうして、「これからの生活に道筋をつける」。こういった「ソーシャルワーク」の仕事の誇りや醍醐味、あるいは相談にのるといふ業務の「専門性」についての三浦SWの熱弁——。

医療福祉部内の異動でICU・救命救急病棟の配属になった際。部内では、「入院直後に、何を目的として、どう関わるか」、患者さんやご家族への対応基準整備に取り組んでいた。

同時期に「救急認定SW」の資格制度ができたことを知り、「実践の見直しができ、資格を取る過程自体も勉強になる」と、資格取得を目指した。

緊急入院という事態が発生した場合、患者さんもご家族もいきなり困ってしまう。まさにその瞬間に機を逃さず「関わりを持つ」のが三浦SWの目下の仕事内容である。

いきなり入院治療が始まり、「何からどう手をつけるか」、その順番の整

理が要る。当事者の「代わりに行なう」のが適切か、当事者自身が考えられるよう、「考え方の整理のサポート」を意識するのがベストか…。

あるいは当事者自身が納得して、これくらいならと折り合いを付ける線を、意識的に探すという方法もあり得る。

良かれと思った援助でも、好ましい方向に進まないかも知れないし、とにかく目先は事を前に進めることが求められるかも知れないし…。

つまり、「相手により、場合により、最善最良の環境を整えられるよう、常に最善を尽くす」。これを「いかにタイミングよく」行なえるか。救急現場でのソーシャルワークは、やはり、「救急対応」が求められる。

そして、仕事の「振り返り」が必須。SWとして、こう発言したことにこう返され、こう言うところ返され…。この「振り返り」を繰り返すことにより、なぜそれが起き、なぜそう対応し、その帰結に至ったか、気づきだす。

これを、SWの言葉では、自分の中に「落ちる」、つまり自分の発言や行為を「自身で納得する」ことになるといふ。

この繰り返して自分の偏りに気づき、自分自身を知ることにもなるのだとか。患者さんやご家族の緊急事態に際し、解決へ向けて腕をふるえたからといって、「表面上の解決になっても、真の解決には至らないこともある」とか。SWの対応は果てしない…。

人それぞれに生活があり、しかもそれが緊急事態で入院や手術を余儀なくされたら、事態はそう単純ではない。

まさにそういう場面に、「相談業務」



▲「大好きなえとくんと仲間たちです (笑)」

▼救命救急病棟の相談個室で



◀ 祝!! 2018年 MVP 受賞
詳細は 4-5 面

で立ち会い、しかも専門性の発揮が求められるのである。

患者さんやご家族の話聴くにしても、「うんうん、分かる分かる!」と、すぐ理解して見せたいのはヤマヤマだが、「もの分かり良く」がアダになる場合だってある。

意味のない動きは慎む

結局、発する言葉ひとつ一つに「意図を込める」のがいちばん心がけている点だという。

対応の仕方、つまり動き方一つに意味があるし、また意味があるように動く。もっと言えば「意味のない動きは慎む」、これもSWとして心がけていることだという。

相談業務のプロというのは、これほどまでに、「動き一つ、発する言葉一つ」に、細やかに神経を行き渡らせており、結局これが、SWの腕の見せどころといえるのだろう。

この道に進んだのは、看護師の母親を見ていて、医療に関わる仕事で、しかも「より広く生活全般に関わる職種」を探した結果、ここに着いた。

相変わらず新婚気分 (笑) に浸ってられる夫、義母、それに大好きな猫のえとくん (オス3歳) たちとの暮らし。

「家族に家事炊事を助けてもらってばかり。ホントに感謝してます〜」で、日は瞬くうちに過ぎていく。



サルコペニアって聞いたことありますか

近森病院外科 科長 塚田 暁

サルコペニアとは、全身の骨格筋量の減少と筋力の低下の状態のことをいいます。サルコペニアは年齢に伴って起きる1次性サルコペニアと、それ以外の原因（がんや手術侵襲など）である2次性サルコペニアがあります。

サルコペニアの基準は多くあり統一されたものがまだありませんが、AWGS (Asian Working Group for Sarcopenia) の基準がよく使用されています (図1)。評価項目は歩行速

度、利き手の握力、筋肉量です。この筋肉量の測定に今回導入した体組成分析装置 (InBody) を使って測定します。これは体内に微弱電流を流し、その抵抗値を測定して脂肪や筋肉などの体組成を推定する装置で生体電気インピーダンス法 (BIA) という測定法です。微弱電流が流れるので心臓ペースメーカーが挿入されている患者さんは使用できません。

さて、このサルコペニアですが、最近の研究で手術の合併症の増加や手術関連死亡率が高いだけでなく、がんの予後にも影響するといわれています。また、化学療法の継続性に

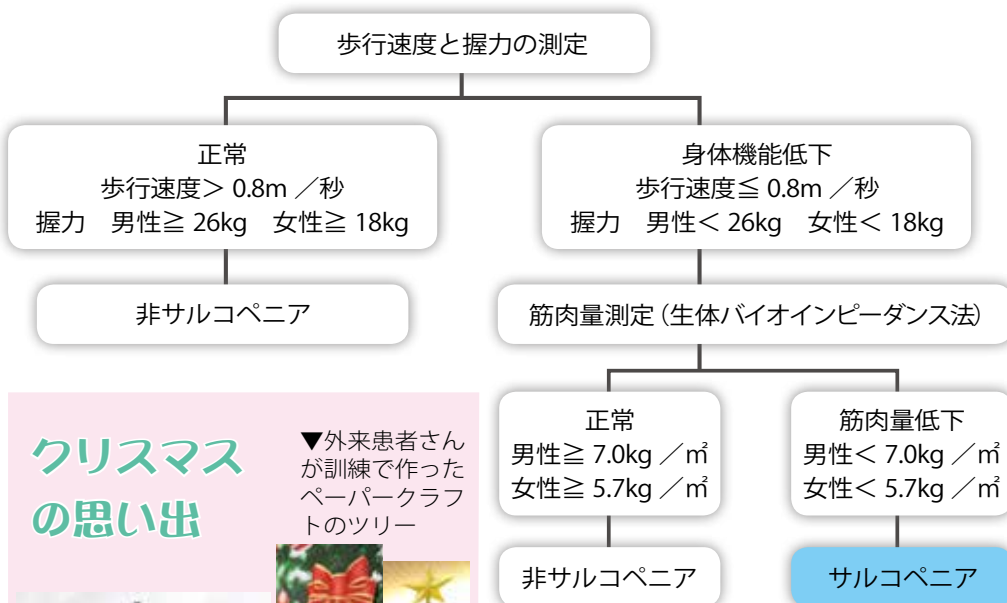
もサルコペニアが影響を与えるという研究もあります。

外科では栄養士と理学療法士の協力もあり、2017年初めより入院中の手術前後の患者さんのサルコペニアの評価を行ってきましたが、退院後の経過を追うことができませんでした。そこで今回外科外来にInbodyを導入しました。

今後は、手術前にサルコペニア患者さんやもう少しでサルコペニアになってしまう患者さん、手術後にサルコペニアになってしまった患者さんに対して、外来で栄養指導や運動指導が行える体制を作っていければと考えています。

つかだ あきら

図1. AWGS (Asian Working Group for Sarcopenia) の基準



クリスマスの思い出

▼外来患者さんが訓練で作ったペーパークラフトのツリー



▼クリスマス会では演奏会も開かれた



▼暖炉を模した力作!

